

中世・草戸千軒探検 ⑨

たくわ
～貯える～

前回までは、草戸千軒Ⅰ展示室“よみがえる草戸千軒”に復元した実物大の町並みを訪ね、町の様子を探検してきました。今回からは、展示室に展示された実際の出土資料を紹介し、

それらによって明らかになった人々の暮らしを探っていききたいと思います。

まずは、人々の生活を支える物資の貯蔵について考えてみましょう。



草戸千軒Ⅰ展示室「貯える」のコーナー

草戸千軒の人々の毎日の暮らしは、水や食料をはじめとする多くの物資によって支えられていました。そうした物資を貯蔵するためのさまざまな容器が、遺跡から出土しています。

中でも特に多いのが、陶磁器の壺つぼや甕かめです。壺と甕との区別は時代によって違いがありますが、中世考古学の世界では、手に抱えて移動できる中・小型の容器を「壺」、

据え置いて使う大型の容器を「甕」と呼んでいます。ただ、当時の人々は大小の区別なく「壺」と呼んでいたようで、中世の文書では酒を醸造するための大型の甕のことも、「酒壺」などと記しています。



土蔵の横に埋められた甕



掘り出された常滑焼の甕

高さ・幅とも1m近くあるような大きな甕は、地面に埋めて使われていたようで、遺跡では胴の下半分を埋めた状態の甕がいくつか発見されました。写真は現在の愛知県で生産された常滑焼とこなめやきの甕で、室町時代の土蔵どぞうに接して埋められていたものです。胴より底が狭く不安定な形をしています。埋めて使うので全く問題なかったようです。埋甕うめがめの用途としては、油や水あるいは穀物などを貯えるためのものであったと考えられます

ですが、この常滑焼の甕は建物の外にあることから、水甕として利用されたものと思われます。

このほかにも、建物内に甕を並べて埋めた遺構も発見されており、これは染色などの手工業に使われたものと考えられます。



11個の甕を並べて埋めた遺構と、出土した備前焼の甕



(主任学芸員 鈴木康之)